

# 木の本遺跡発掘調査概要・IV

— 1級河川平野川改修工事に伴う発掘調査 —

1999年12月

大阪府教育委員会



## はしがき

河内平野は大阪平野の中央部に位置します。この肥沃な沖積平野は古くから人々の活動領域でありました。この地域をしめす「河内」という地名は、水の豊富な地域であることを表しています。大和川は上流からの土砂の運搬によって河内の地に肥沃な大地を形成しました。大和川の豊富な水は、生命の源であると同時に、時には洪水として田畠に押し寄せ、人々の脅威となることもあります。河内平野の歴史は、先祖たちが果敢に治水に取り組み、陸化をすすめ、生活基盤の安定化を図った歴史でもありました。その痕跡が「遺跡」として、あちらこちらに残っています。平野川流域でも木の本遺跡や田井中遺跡などの遺跡があり、地下深いところから数々の痕跡が発見されています。古墳時代ばかりではなく、縄文時代晚期や弥生時代、中世、近世の遺構、遺物も発見されており、この地域の歴史の長さを物語っています。

1級河川平野川改修工事に先立つ発掘調査でこれまで亀井遺跡、田井中遺跡と木の本遺跡の発掘調査を実施して参りました。田井中遺跡では縄文時代晚期から平安時代におよぶ遺構群を発見、木の本遺跡では古墳時代前期、中期を中心とした遺構群を確認しました。今回の調査は木の本橋上流から印田橋にかけての部分で、古墳時代前期を中心とした遺構や遺物を発見しました。

調査を実施するにあたって、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力を頂いたことを、深く感謝いたします。ひきつづき皆様のご協力とご理解のほど、よろしくお願ひいたします。

平成11年12月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

## 例　　言

- 1、本書は1級河川平野川改修工事に先だって実施した、八尾市南木の本2～3丁目所在の木の本遺跡の平成9～10年度の発掘調査概要報告である。
- 2、調査は大阪府土木部の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課技師 岩瀬透、横田明の担当により実施した。
- 3、現地調査については、平成9年度は岩瀬透が第2地区、第3地区左岸側（F区）、第4地区南側（E区）を、平成10年度に横田明が第3地区右岸側（G区）、第4地区北側（D区）、第5地区を担当した。
- 4、標高の表記については従来の文化財調査との関係から、T.P.を基準として表記した。
- 5、花粉分析については川崎地質株式会社関西支社に委託した。
- 6、航空測量については、富士測量株式会社に写真撮影、図化までを委託した。
- 7、本書の執筆は岩瀬透、横田明が共同して行い、編集は横田明が行った。
- 8、本書に用いた遺構写真は岩瀬透および横田明が、遺物写真については阿南辰秀氏が撮影した。

## 目 次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置 .....    | 1  |
| 第2章 調査にいたる経過 ..... | 2  |
| 第3章 調査の方法 .....    | 2  |
| 第4章 調査の成果 .....    | 5  |
| 第5章 まとめ .....      | 32 |

## 挿 図 目 次

|                                 |       |
|---------------------------------|-------|
| 第1図 八尾市と木の本遺跡の位置 .....          | 1     |
| 第2図 木の本遺跡位置図 .....              | 1     |
| 第3図 木の本遺跡調査区配置図 .....           | 2     |
| 第4図 第2地区遺構配置図、土層断面図 .....       | 3～4   |
| 第5図 第2地区自然河川NR-001土層断面図 .....   | 6     |
| 第6図 第2地区SK-070遺物出土状況実測図 .....   | 8     |
| 第7図 第2地区SE-040遺物出土状況実測図 .....   | 9     |
| 第8図 第2地区SE-048遺物出土状況実測図 .....   | 10    |
| 第9図 第2地区出土遺物実測図（1） .....        | 11    |
| 第10図 第2地区出土遺物実測図（2） .....       | 12    |
| 第11図 第2地区出土遺物実測図（3） .....       | 13    |
| 第12図 第3地区遺構配置図、土層断面図 .....      | 15～16 |
| 第13図 第3地区主要遺構土層断面図 .....        | 17    |
| 第14図 第4地区遺構配置図、土層断面図 .....      | 19～20 |
| 第15図 第4地区主要遺構土層断面図 .....        | 21    |
| 第16図 第4地区SD-131出土遺物実測図 .....    | 21    |
| 第17図 第4地区SK-134出土遺物実測図 .....    | 22    |
| 第18図 第4地区SK-136出土遺物実測図（1） ..... | 23    |
| 第19図 第4地区SK-136出土遺物実測図（2） ..... | 20    |
| 第20図 第4地区SK-136出土遺物実測図（3） ..... | 24    |
| 第21図 第4地区SK-159出土遺物実測図 .....    | 24    |
| 第22図 第4地区SK-205出土遺物実測図 .....    | 26    |
| 第23図 第4地区SK-206出土遺物実測図 .....    | 26    |
| 第24図 第4地区SK-218出土遺物実測図 .....    | 27    |

|      |                            |    |
|------|----------------------------|----|
| 第25図 | 第4地区SK-219出土遺物実測図          | 27 |
| 第26図 | 第4地区SK-220出土遺物実測図          | 27 |
| 第27図 | 第4地区第23層出土遺物実測図            | 28 |
| 第28図 | 第5地区遺構配置図                  | 29 |
| 第29図 | 第5地区主要遺構土層断面図              | 30 |
| 第30図 | 第1地区SD-001、第5地区SD-004位置関係図 | 31 |

## 図 版 目 次

- 図版1 第2地区NR-001土層断面  
第2地区第4遺構面南半部（北から）
- 図版2 第2地区SK-070遺物出土状況  
第2地区SE-048遺物出土状況
- 図版3 第3地区第2遺構面北半部（南から）  
第3地区第2遺構面南半部（南から）
- 図版4 第4地区第2遺構面北半部（北から）  
第4地区第2遺構面南半部（北から）
- 図版5 第4地区西壁土層断面  
第4地区SK-206
- 図版6 第4地区SE-136遺物出土状況  
第4地区SK-134
- 図版7 第5地区第2遺構面西半部（北から）  
第5地区北壁土層断面
- 図版8 第5地区SD-004遺物出土状況  
第5地区SK-009遺物出土状況
- 図版9 第4地区出土遺物（1）
- 図版10 第4地区出土遺物（2）
- 図版11 第4地区出土遺物（3）

## 第1章 遺跡の位置

木の本遺跡は八尾市南木の本を中心にひろがる遺跡で、弥生時代中期～古墳時代前、中期、平安時代、中世から近世にいたるまで、いろいろな時代に属する様々な遺構、遺物が確認されている。遺跡の東側には生駒山地、南側には金剛山地を臨み、河内平野を横切るように流れる大和川は目前である。河内を代表する河川である大和川は肥沃な平野を形成する源であったが、水量の豊富さの故にたびたび氾濫を繰り返し、多量の土砂を堆積させ、幾たびもの集落地の移動をよぎなくさせた。

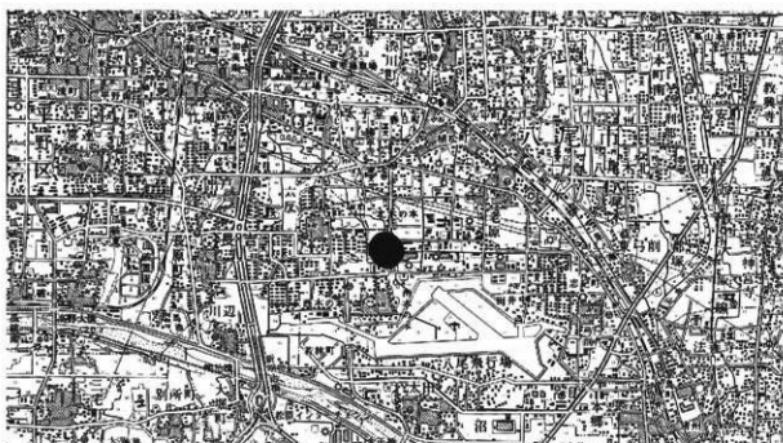
江戸時代になって大和川が現在の流路に付け替えられると、地盤は安定し、広大な耕地の開拓が可能となつた。木綿などの河内の特産品もこのような農業基盤の安定の成果で、河内地域に新たな発展をもたらす原動力となった。

調査区周辺からは、弥生時代中期～平安時代におよぶ多様な遺構、遺物が発見されている。大阪府教育委員会による木の本遺跡の平野川改修関連調査としては、平成8年度に行われた第1地区の調査（『木の本遺跡発掘調査概要・III』で報告）が最初である。

今報告に掲載した第2～第5地区は、南木の本2丁目から3丁目にかけての平野川の護岸および河道内部分にあたる。



第1図 八尾市と木の本遺跡の位置



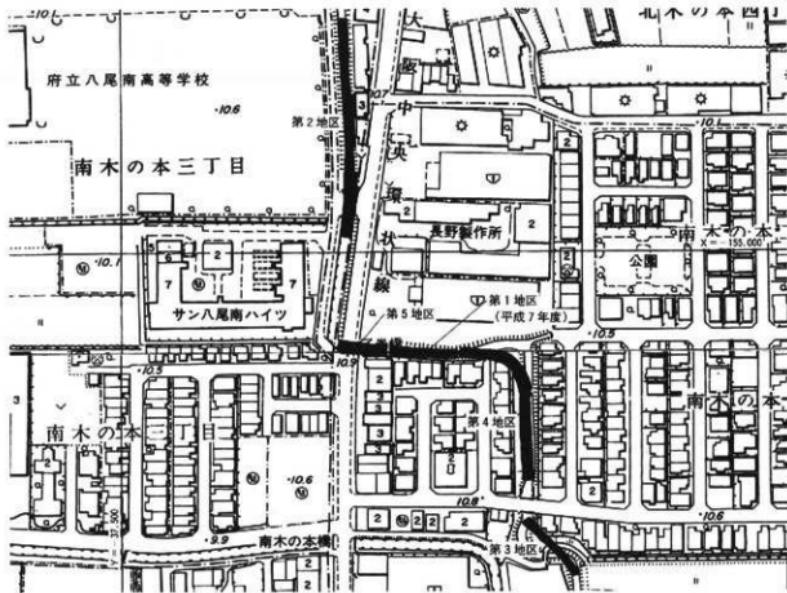
第2図 木の本遺跡位置図

## 第2章 調査に至る経過

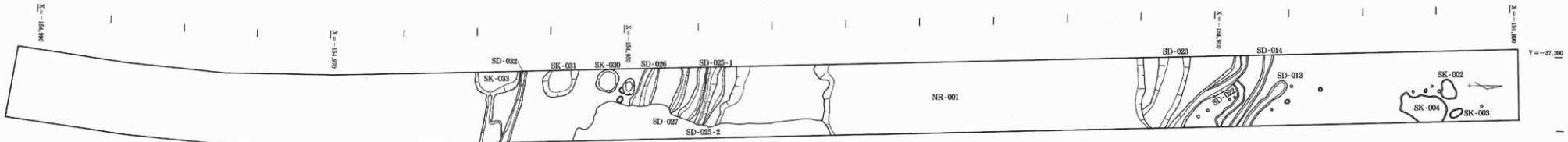
平野川は大和川から分岐する支流のひとつで、現在は柏原市古町付近で大和川からわかれ、八尾市、大阪市平野区、生野区、東成区を経て、森ノ宮で第二寝屋川に合流する。地域により、別の名称がある。平野川と呼ばれるのは平野郷より下流の部分で、当地域では了意川と呼ばれている。平野川は幅が狭く、長年の土砂の堆積によって底が浅い上に、大雨の際には一気に大量の雨水が流入する河川だった。このまま放置すると周囲が冠水する懼れがあるので、大阪府土木部は河川改修工事を計画した。工事は川幅を拡幅し、川底を掘り下げる工事だった。この地は木の本遺跡という弥生時代中期から古墳時代中期、中世などを主体にする集落がある。取り扱いについて文化財保護課と土木部は協議を行った結果、まず試掘調査を実施し、遺構の有無を確認し、順次調査を実施する運びとなった。

## 第3章 調査の方法

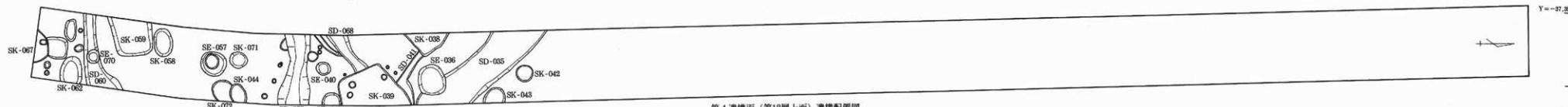
調査区は1級河川平野川改修工事に伴う工事用鋼矢板の内部である。そのため最大幅5m、延長數十mという調査区となった。本書で記載の調査区名は着工順に番号をつけ、下流側（北側）から第2地区、第5地区、第1地区、第4地区、第3地区とした。これらは調査区が細長い上に湾曲がはげしく、その上冠水も頻繁である。本来は国土地標軸を基準に地区割りを設定するのが基本と思われるが断念し、工事用の区画を踏襲、遺物取り上げの地区割りに準用した。



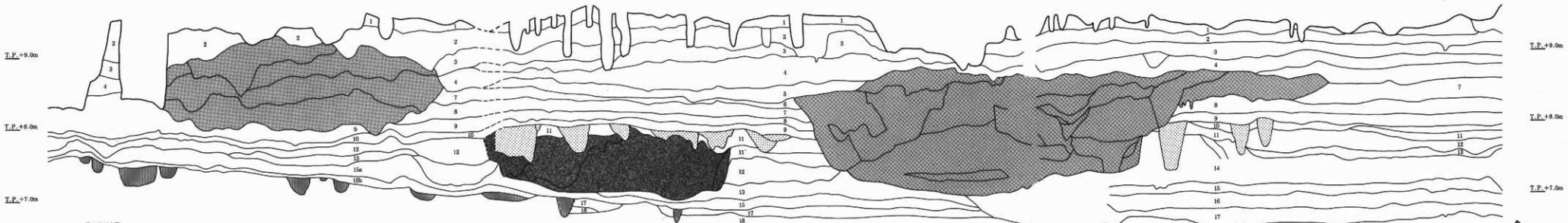
第3図 木の本遺跡調査区配置図



第2造構面（第7層上面）造構配置図



第4造構面（第18層上面）造構配置図



- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 第2地区上層        | 11. 緑褐色粘土          |
| 1. 單孔地質上      | 12. 緑灰褐色粘土と灰褐色砂の互層 |
| 2. 細粒灰色粘土     | 13. 緑灰褐色粘土         |
| 3. 緑灰褐色土      | 14. 灰褐色土           |
| 4. 灰色粘土       | 15. 灰褐色粘土と（砂を含む）   |
| 5. 灰色粘土       | 15b. 黑褐色粘土         |
| 6. 灰色砂とシルトの互層 | 16. 灰褐色粘土          |
| 7. 灰色土        | 17. 緑灰褐色粘質シルト      |
| 8. 緑灰褐色粘質シルト  | 18. 明緑褐色シルト        |
| 9. 灰色粘質シルト    | 19. 緑灰褐色無砂         |
| 10. 灰黑色粘土     |                    |

第4図 第2地区造構配置図、土層断面図

## 第4章 調査の成果

河川の堆積層ということもあり、層序も調査区によってかなりの違いがある。模式的に述べると、近世の堆積層の下には無遺物層もしくは中世遺物包含層があり、その直下で古墳時代中期の包含層と遺構面、その下は古墳時代前期の包含層、遺構面と続くのである。しかしながら、上流では古墳時代前期と中期でそれぞれ1面ずつ確認されているが、下流側は遺構も顕著ではなく、前期と中期の遺構が重複している部分もある。地区毎に層序や遺構を解説したい。

### 第1項 第2地区の調査（第4図）

第2地区は、今回の調査区のうち最も下流側に位置する調査区である。本来は延長100mの連続するひとつの調査区であったが、河川改修事業との兼ね合いからA、B、Cの三つの地区に分割して調査した。ここでは第2地区全体を通して記述する。

#### 1. 層序

改修工事が、現平野川の流路内を鋼矢板で仕切って川幅を制御し、その内側を排水したあとで掘削する方法で行われるため、幅5mのトレンチのほとんどが流域内であり、現地表から残存していたのは西側の、多いところで幅約2m程の範囲であった。

平野川は、ほぼ現位置に安定した江戸時代から少なくとも2回の護岸改修を行っており、護岸はその都度内側に張り出してきていることを示している。初期の川底は再深部でT.P.+7.2mにまで達していたが、その後砂層の堆積によって現在では、T.P.+8.2m付近にまで砂層およびドロが著しく堆積していることが判明した。平野川埋土の砂層からは、陶磁器、瓦質土器、土師器などが大量に出土した。

土層の番号は上から順次付しているが、このなかには部分的な間層も含まれている。ここでは調査区全体を通してみられる層についてのみ記述する。

第1層から第3層までは黄灰色系の粘質土で、近世の堆積層である。陶磁器、瓦質土器などが少量出土している。

第4層は灰色粘土で、中世後期の包含層である。土師器、瓦質土器などが少量出土した。また、この層の上面で、取水施設などの遺構を検出した。近世の耕作に伴うものと思われる。

第5層は灰色粘質土で、平安時代後期の包含層となっている。須恵器、黒色土器B類などが少量出土している。

第7層は灰色粘土で、奈良時代、平安時代の包含層となっている。須恵器、土師器、黒色土器A類などが出土している。A地区とC地区の2ヵ所で、この層の上面をベースとした流路を検出した。

第8層は暗灰色粘質シルトで、古墳時代後期の包含層となっている。須恵器が少量出土した。

第9層は灰色粘質シルトである。この層からは遺物は出土しなかったが、上下の土層との関連で古墳時代後期の堆積層と考えられる。

第10層は灰黒色粘土で、古墳時代後期の包含層である。須恵器、土師器などが少量出土した。この層の上面が遺構面となっており、溝、土坑、ピットなどを検出した。

第11層は緑灰色粘土で、古墳時代中期の包含層となっている。須恵器、古式土師器などが少量出土した。B地区で、この層の上面をベースとした流路を検出した。

第12層は緑灰色粘質シルトと灰黄色砂の互層である。この層から遺物は出土しなかったが、上下の土層との関連で、古墳時代中期の堆積層と考えられる。

第13層は暗灰緑色粘土で、古墳時代中期の包含層となっている。古式土師器が少量出土した。

第15層は黒色系の粘土層であり、粘性の度合で2層に分層できた。第15a層は黒灰色粘質土で、古墳時代中期の包含層となっている。須恵器、古式土師器などが大量に出土した。

第15b層は黒灰色粘土で、古墳時代前期の包含層となっている。古式土師器が大量に出土した。

第18層は明緑灰色シルトで、この層の上面が古墳時代前期の遺構面であり、溝、土坑、井戸、ピットなどが多数検出された。

## 2. 主な遺構と遺物

第2地区では、計5面の遺構面を検出した。

### 第1 遺構面

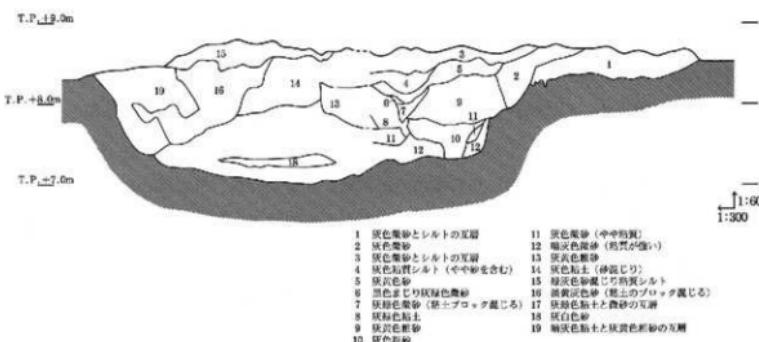
第1遺構面は第4層上面で検出した。検出した遺構は幅2m、深さ0.3mの溝1条であった。埋土は1層で、暗灰黄色土である。内部から遺物は出土しなかったが、上下の層との兼ね合いから近世に比定できるものと考える。

### 第2 遺構面

第2遺構面は第7層上面で検出した。検出した遺構は流路2条である。

### 自然河川 NR-001 (第5図、図版1)

A地区の南半部からB地区の北端部にわたる地区で検出した。ほぼ東西方向に流れる。幅約20



第5図 第2地区自然河川NR-001土層断面図

mで、深さは最深部で約1.5mを測った。埋土は大きく灰色ないしは灰緑色系の微砂、灰色粗砂、褐色系のシルトに分けられる。内部から須恵器、土師器、瓦類などが少量出土した。

#### 自然河川 NR-002

C地区で検出した。ほぼ東西方向に流れる。幅約20mで、深さは最深部で約1.3mを測った。埋土は大きく褐色系の微砂と、灰色系の粗砂に分けられた。内部から須恵器、土師器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。

第2遺構面で検出した流路は、いずれも平安時代後期に比定できるものと考える。

#### 第3遺構面

第3遺構面は第11層上面で検出した。遺構は溝、土坑、ピット、自然流路などで、A地区からB地区にかけての地域で検出され、C地区では遺構がみられなかった。ここでは遺物が出土した遺構について説明する。

#### 土坑 SK-030

B地区的南半部で検出した。不整円形状を呈する土坑で、径約1.5mを測った。深さは最深部で0.3mである。埋土は1層で、緑灰色粘土である。内部から須恵器、土師器が少量出土した。

#### 土坑 SK-031

B地区的南半部で検出した。不整橢円形状を呈する土坑で、長軸径2.5m以上、短軸径2mを測った。

#### 自然河川 NR-034

B地区的南半部で検出したほぼ東西方向に流れる流路である。幅約15mで、深さは最深部で約0.9mを測った。埋土は大きく暗緑灰色粘質土と灰黄色粗砂の2層に分けられる。灰黄色粗砂から土師器が少量出土した。

第3遺構面で検出した遺構は、出土遺物からみるとある程度の時期差があるが、上下の包含層の出土遺物をも踏まえてみると、古墳時代後期と考えるのが妥当である。したがって、遺物の検出されなかった遺構も含めて、古墳時代後期としておく。

#### 第4遺構面(図版1)

第4遺構面は第18層上面で検出した。溝、土坑、井戸などの遺構を多数検出した。

#### 溝 SD-035

C地区的北端部で検出した南東から北西方向に走る溝である。幅約2.5mで、深さは最深部で約0.15mを測った。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器が大量に出土した。

#### 溝 SD-060

C地区的南端部付近で検出した東西方向に走る溝である。幅約1mで、東端部付近で約1.5mに膨らむ。深さは約0.2mを測った。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

## 溝 SD-068

C地区の北半部で検出した南西から北東方向に走る溝である。幅約0.8mで、深さは約0.1mを測った。後述するSK-036によって、北西側の上面を削平されていた。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

## 土坑 SK-038

C地区の北半部西壁際で検出した土坑である。平面プランのほとんどが調査区外にあるため、形状や規模は不明である。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

## 土坑 SK-039

C地区の北半部で検出した土坑である。方形に近い形状を呈する。平面プランのうち東側は東壁外にのびている。南北軸4.6m、東西軸5m以上を測った。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器が少量出土した。

## 土坑 SK-044

C地区のはば中央部の東壁部で検出した土坑である。ほぼ椭円形状を呈する。1.5m以上×1mで、比較的浅く、深さ0.3mを測った。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

### SK-044出土遺物（第9図1～3）

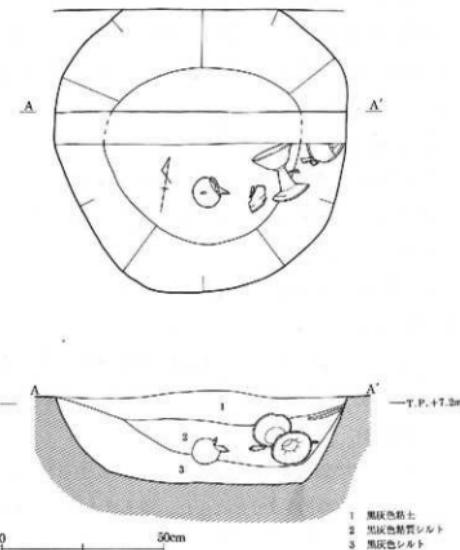
土坑044からは古式土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。1は小形丸底壺で、体部上半以上の破片である。2は比較的大型の鉢で、平らな底部と外上方にわずかに内弯しつつ立ち上がる部体からなる。3は高杯で、杯部口縁を欠損している。

## 土坑 SK-062

C地区の南端部の東側で検出した土坑である。椭円形状を呈する。1.8m以上×1.3mで、深さ0.4mを測った。埋土は1層で、黒灰色粘土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

### SK-062出土遺物（第9図6）

SK-062からは古式土師器がごく少  
量出土した。そのうち図示し得たのは



第6図 第2地区SK-070遺物出土状況実測図

1点である。

6は甕で、口縁部のみの小片である。端部外面に面を成す。

#### 土坑 SK-070（第6図、図版2）

C地区の南端部付近で検出した土坑である。不整円形状を呈する。径約0.9mで、深さ0.28mを測った。埋土は3層に分層でき、上から黒灰色粘土、黒灰色粘質シルト、黒灰色シルトとなっている。内部から古式土師器が少量出土した。

#### SK-070出土遺物（第10図27～31、第11図32～35）

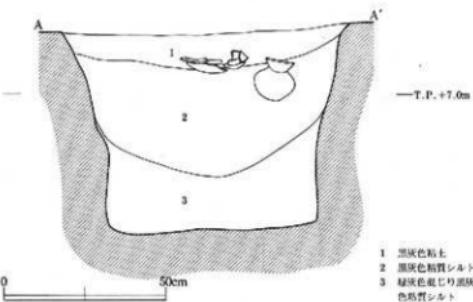
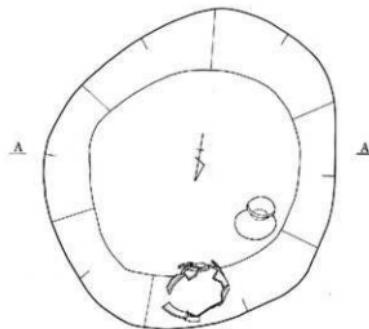
土坑070からは古式土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは9点である。27、28は甕で、そのうち27は口縁部の破片である。立ち上がりが一度外反した後に直立する、複合口縁状を呈する。端部は内側に肥厚し、上端に面を持つ。28は口縁部を欠損している。肉厚の球形状を呈する体部で口縁の立ち上がりは外反する。29～32は甕で、いずれも中位で張りを持つ体部と、まっすぐ外上方に開く口縁部から

なる。端部は内側に肥厚し、  
上端に面を持つものと丸く収  
めるものがある。

33～35は高杯で、そのうち33  
はほぼ完形に復元でき、34、  
35は杯部のみの破片である。  
杯部内面の立ち上がりは、底  
部から口縁部にかけて緩やか  
に曲線的にのびるもの（33、  
35）と、平らな底部で口縁の  
立ち上がりが直線的に開くも  
の（34）がある。

#### 井戸 SE-040（第7図）

C地区のほぼ中央部で検出  
した井戸である。径約1.8m  
の不整円形状を呈する。深さ  
は約0.6mを測った。埋土は  
3層で、上より黒灰色粘土、  
黒灰色粘質シルト、緑灰色混  
じり黒灰色粘質シルトとなっ  
ている。主に第1層、第2層  
から完成品を含む古式土師器



第7図 第2地区SE-040遺物出土状況実測図

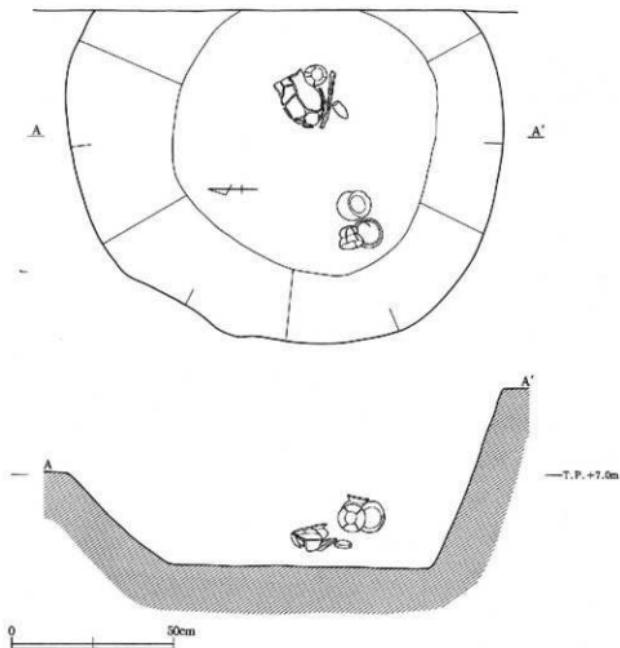
が比較的まとまって出土した。

#### SE-040出土遺物（第9図8～20）

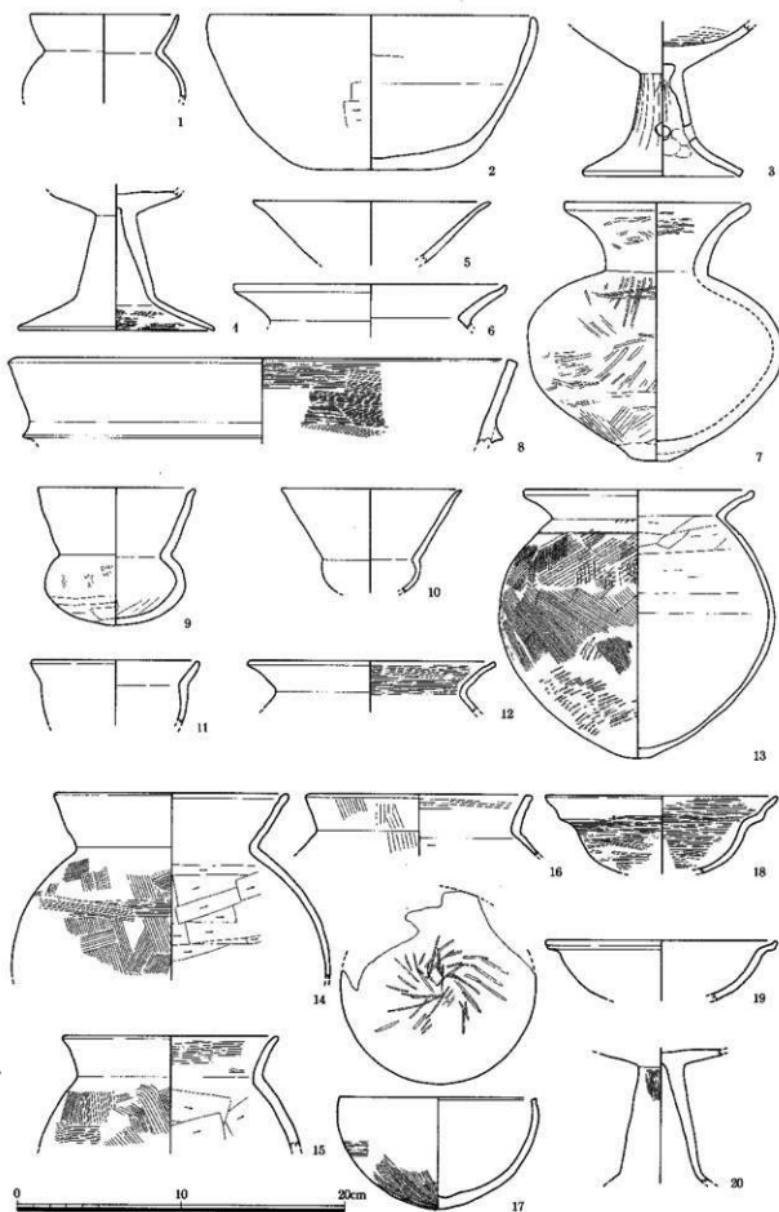
井戸040からは古式土師器が比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは13点である。8は大型の壺で、口縁部のみの破片である。貼付突帯状の稜がみられる。9、10は小形丸底壺で、いずれも最大径は口縁部にある。ともに扁球形の体部を持つが、9は比較的大きな体部で、10はごく小さな体部と大きく外上方に開く口縁部から成る。11は小形の鉢で、体部上位と口縁部のみの破片である。12～16は壺で、口縁が短く外上方に開くもの（12、13）、口縁が比較的高く外上方にのびるもの（14～16）がある。17～19は鉢で、全体的に丸味を持った深いもの（17）と、浅い体部で、口縁の立ち上がりが複合状を呈するもの（18、19）がある。20は高杯で、杯底部と脚胴部の破片である。

#### 井戸 SE-048（第8図、図版2）

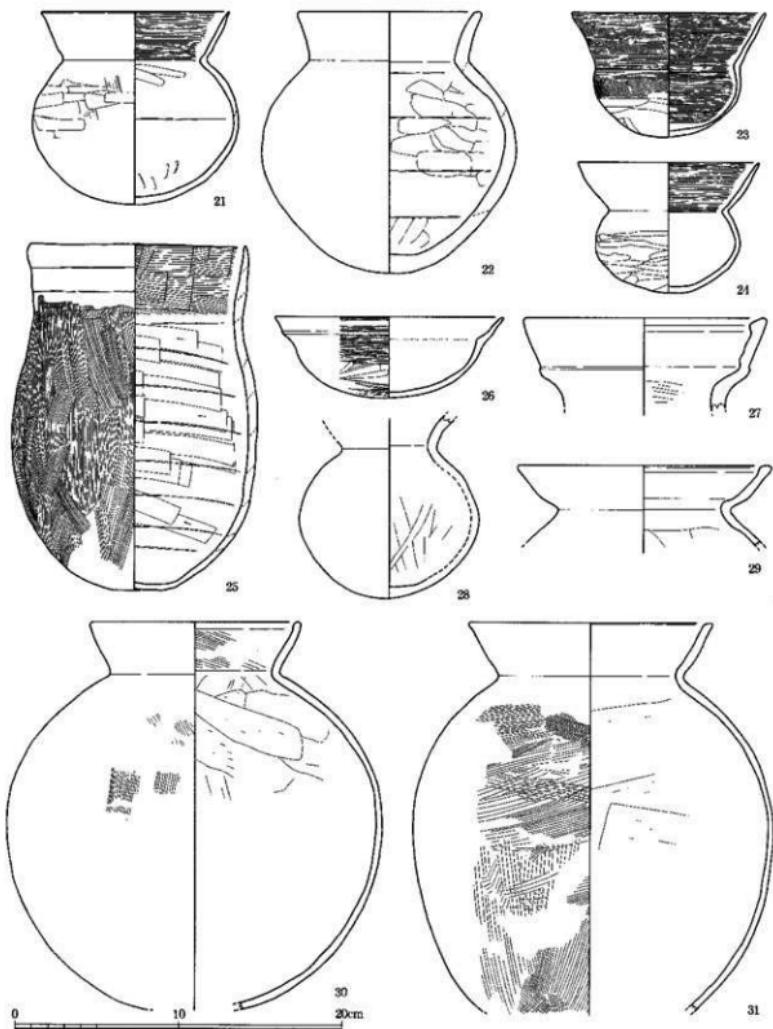
C地区の中央部東端で検出した井戸である。東端部は調査区外にあり全体の形状は不明であるが、径約1.4mの円形状を呈するものと思われる。深さは約0.55mを測った。埋土は1層で、黒



第8図 第2地区SE-048遺物出土状況実測図



第9図 第2地区出土遺物実測図(1)

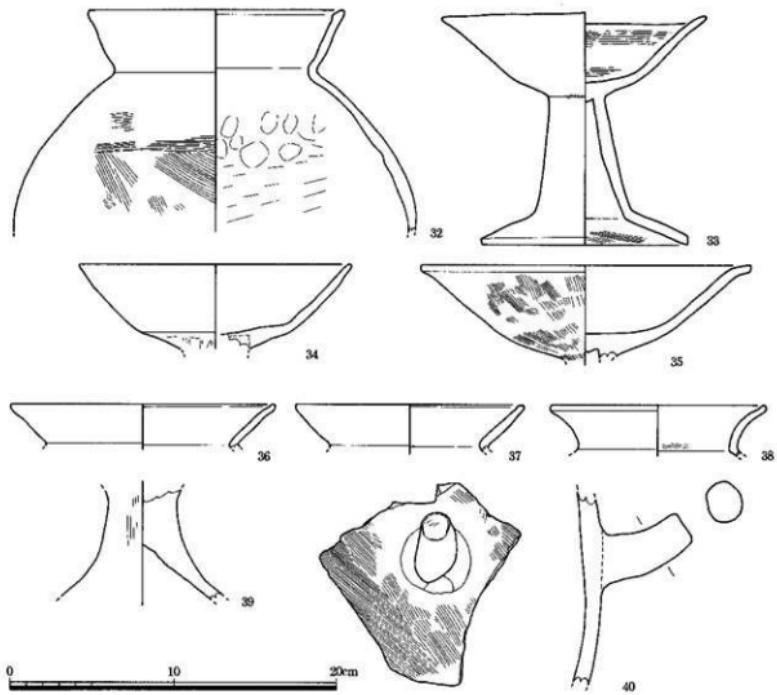


第10図 第2地区出土遺物実測図（2）

灰色粘質シルトである。内部から古式土師器が少量出土した。

SE-048出土遺物（第10図21～26）

井戸048からは古式土師器が少量出土したが、そのほとんどが完形ないしはそれに近いものであった。6点を図示した。21, 22, 25は壺で、いずれも変化に富んだ形状を呈する。21は球形の



第11図 第2地区出土遺物実測図（3）

体部にまっすぐ外上方に開く口縁部が付く。22は中位で張りを持つ体部に短く直立する口縁部が付く。25は長胴形の体部で、体部は上端でごくわずかに内傾し、口縁部で再びごくわずかに外反し、直立して終わる。23、24は小形丸底壺で、いずれも扁球形の体部に外上方に直立する口縁部が付く。

### 3. 小結

第2地区的調査によって、以下の知見を得た。

まずひとつは、庄内3式併行と布留2式併行の段階の集落遺構を検出したことである。調査区の南西方で以前に確認されている、同時期の集落の北東端部にあたるものと思われ、集落の範囲を限定できた点で大きな成果といえる。次に古墳時代中期以降に、付近を流れていたとされる旧平野川の状況が、調査区の縦断面によって把握できたことがあげられる。古墳時代中期以降は、自然河川以外には明確な遺構は確認できなかったが、複数の面で河川が存在し、氾濫による砂の堆積、滯水によるシルトの堆積を繰り返しつつ現在に至っていることを再確認し得た。

## 第2項 第3地区の調査（第12回）

第3地区については、護岸工事の関係上左岸側（F区）と右岸側（G区）に分けて調査した。そのため幅2mほどの範囲に限定され、調査区の狭小さから平面的に遺構を確認し、その性格を分析する事が不可能であった。そのため、ここでは調査の際に作成した縦断面に基づいて、知り得たことを中心として、遺構については若干補足的に触れるのみとする。

### 1. 層序

この調査区は現代の擾乱が非常に顕著で、場所によっては最終遺構面にまで及ぶ状態であった。そのため、断面観察もままならない状態であった。

第1層は黄褐色土で、T.P.+9m付近で確認した。残存しているのはごく一部のみである。近世の遺物を含んでいる。

第2層は灰色粘土である。この層も検出状況は上層とほぼ同様である。

第3層は灰色粘質シルトである。この層から須恵器・土師器が検出された。古墳時代後期の包含層である。第2地区の第9層に対応する。

第4層は灰黒色系のシルトであるが、4a, 4bのふたつに分層が可能であった。

第4a層は灰黒色粘質シルトで、内部から須恵器・韓式系の土器などを大量に検出した。古墳時代中期から後期の良好な包含層である。この層の上面が古墳時代後期の遺構面で、断面上でいくつかの遺構が確認された。第2地区の第15a層に対応する。

第4b層は色感は4aとほとんど変化がないが、粘質が弱く、明確に分層できた。内部から古式土師器が検出された。古墳時代前期の包含層である。第2地区の第15b層に対応する。

第5層は緑灰色粘質シルトである。この層の上面が遺構面となっており、多数の遺構を確認した。古墳時代前期の遺構面で、第2地区の第18層に対応する。

### 2. 主な遺構

第4地区と同じく古墳時代の遺構面については2面確認された。上面は第4a層の上面を基盤とし、下面是第5層を基盤とする。

#### 第1遺構面

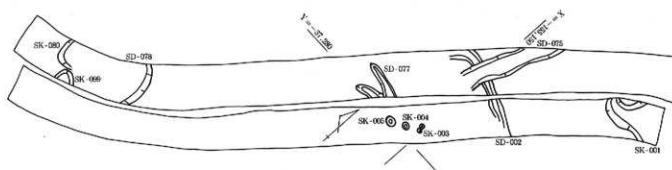
南側は近年の橋の造作によって大きくえぐられていた。北側についてはなんとか検出できたが、若干の溝や柱穴が検出されただけであった。標高T.P.+8.3m程度に基盤がある。

#### 土坑 SK-001

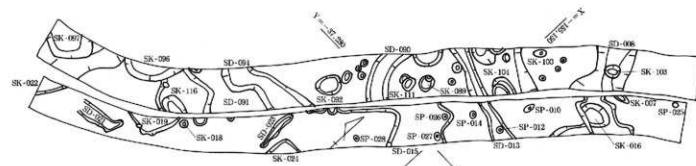
東西にのびるであろう不定形の落ち込み状の遺構である。幅1.3m、深さ0.7mである。埋土は粘土が主体で、上層が黒灰色粘土、下層が青色シルトを含む黒灰色粘土である。このうち上層は遺物を含んでいる。遺物としてはおよそ5世紀末～6世紀初頭と推測される須恵器の杯蓋などが出土している。

#### 溝 SD-002

東西に伸びる小溝である。幅0.5m、深さ0.4mで、黒灰色粘土を埋土とする。

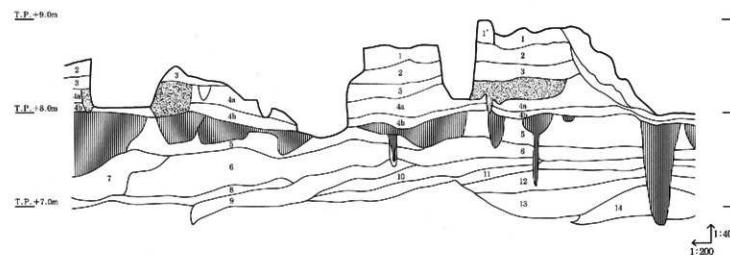


第1遺構面（第4a層上面）遺構配置図



第2遺構面（第5層上面）遺構配置図

0 15m



第12図 第3地区遺構配置図、土層断面図

## 第2遺構面

第5層を基盤とする遺構面で、標高 T.P. +8.0m

T.P.+8.0mである。

土坑 SK-007

幅0.6m、深さ0.2m程度の土坑である T.P. +8.0m

る。黒灰色粘土を埋土とする。

溝 SD-008

SK-016と重複する溝状遺構である。

幅1m、深さ0.2m程度で黒灰色粘土

を主体としている。

柱穴 SP-010, 012

調査区北側にある柱穴である。幅

0.3m、深さ0.1~0.2mで、暗灰色粘

土が主体である。

溝 SD-013

幅1m、深さ0.1mの溝である。黒灰色粘土を主体とする。

土坑 SK-015

東西に伸びる落ち込み状遺構である。幅2.5m、深さ0.2mで、黒灰色粘土を主体とする。

土坑 SK-016

黒灰色系統の粘土を主体とする。幅2m深さ0.2m程度の深い溝状の落ち込みの真ん中に、土坑状の落ち込みがある。この上坑状落ち込みは、幅0.5m、深さ0.4mで、黒灰色粘土、黒色粘土、緑灰色粘土などが堆積している。遺物としては土師器壺のほかに、1形式末~2型式初の須恵器蓋杯などが、検出されている。

土坑 SK-017

幅0.6m、深さ0.4mのピット状の遺構である。暗灰色粘土を主体としている。

土坑 SK-019

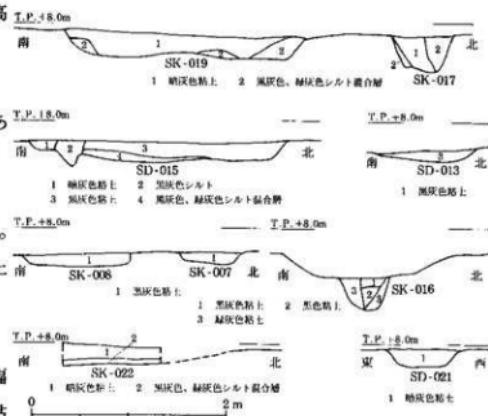
略方形の土坑状の遺構である。幅2.5m、深さ0.2~0.3mで、底は平坦である。暗灰色粘土を主体とし、若干の緑灰色シルトを含んでいる。遺物はV様式と思われる長頸壺を含む。

溝 SD-021

調査区南端で検出された溝状遺構である。幅0.8m、深さ0.1mであり、埋土は暗灰色粘土を主体としている。遺物は5世紀後半代が主体で、須恵器杯、土師器壺などが出土している。

溝 SD-022

浅い落ち込みで、調査区南端で一部だけが検出されている。不明土坑で黒灰色粘土を主体としている。



第13図 第3地区主要遺構土層断面図

### 3. 小結

第3地区の調査では、範囲の狭小さや後世の攪乱の影響で、遺構の性格を追求するに至らなかつたが、多数の遺物が出土した。これらや断面の観察によって、第2地区の集落と相前後する時期の集落が存在することが推定された。今後の調査が注目される。

### 第3項 第4地区（第14図）

#### 1. 基本層序（図版5）

この地区も土層は基本的に河川の堆積層である。旧川底に厚く堆積したヘドロを除去すると唐津焼などをふくむ旧平野川の川底砂が出土した。それ以下の土層は粘土と砂の互層である。

第1層は近年のヘドロ層および盛り土層である。場所によっては、層厚1mにおよぶ。上面の標高はT.P +9.4mを前後する。調査区のセンターより左岸側には、住宅の基礎の盛り土が厚く堆積していた。

第2～7層は近世の堆積層で、調査区全体に広がっている。1ヶ所であるが、畦畔状の盛り上がり（5、6）が確認されている。含まれる遺物は唐津焼が多く、およそ17世紀前半を中心とするものである。また近世のものと推測される南北方向の流路も検出された。この流路は粘土層や砂層の互層である。

第8～15層は灰色や青色のシルトや粘質土、砂を主体とする堆積層で、数十cmの層厚である。調査区全体にひろがっており水平堆積で酸化鉄を多く含むことから、耕作地に関連する堆積土であった可能性がある。

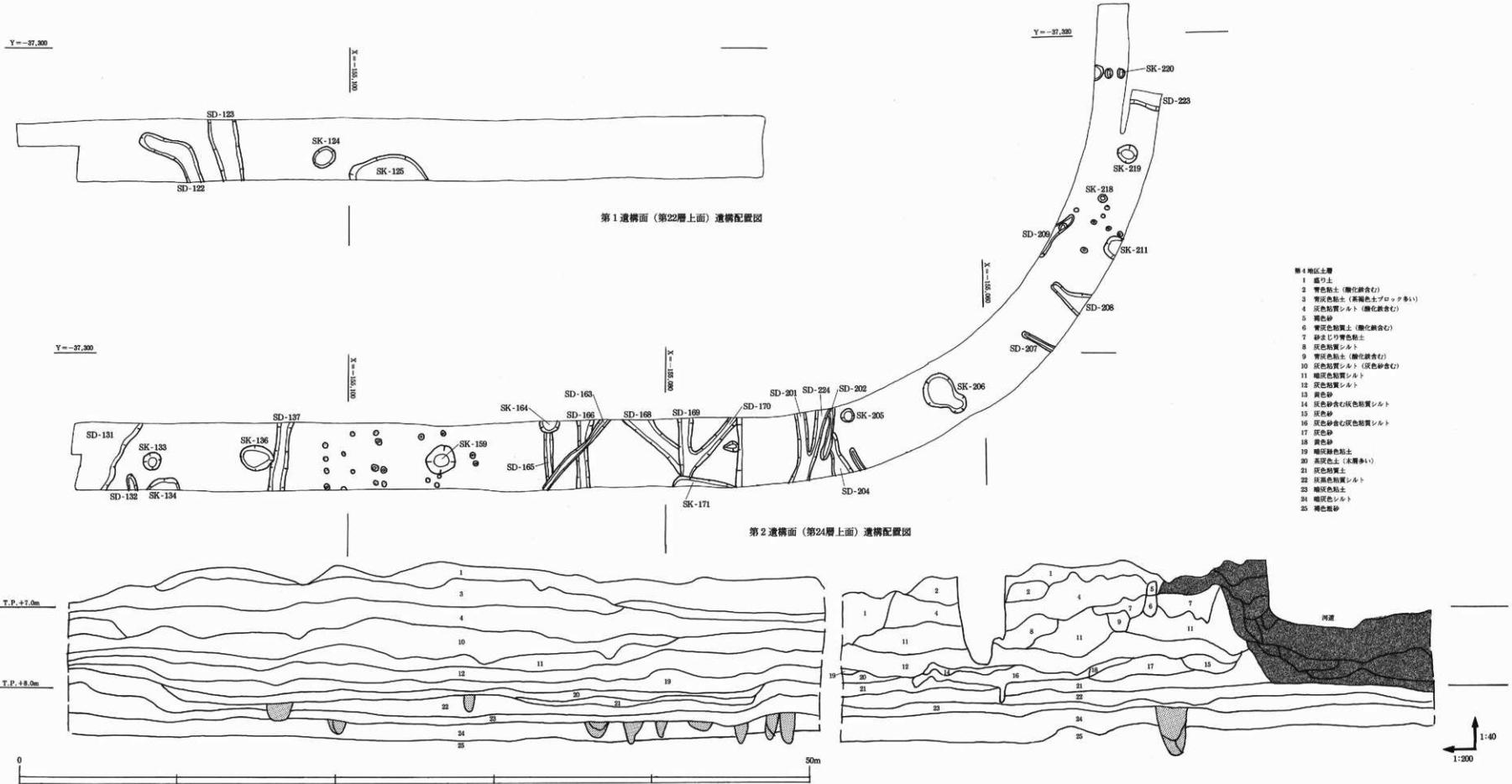
第16～21層は、灰色のシルトや粘土、そして灰色砂などから構成される水平堆積の層である。調査区全域にひろがっており、層厚約0.2m。22層と接する部分では、若干の古墳時代遺物を含んでいる。

第22～23層は、灰黒色粘質シルト層を主体とする層である。古墳時代前期の遺物を含む。この層も比較的均質に調査区全体に広がっている。第22層である灰黒色粘質シルト層上面に古墳時代中期相当の遺構面（第1遺構面）が確認された。第1遺構面は標高T.P +7.9mを前後する。しかし遺構は希薄である。第22層の灰黒色粘質シルト層と第23層の暗灰色粘土層の間には遺構面は確認できなかった。

第24～25層は、暗灰色シルト層および褐色粗砂層で構成される層群である。第24層の暗灰色シルト層は調査区全域に層厚約0.2mでひろがっており、この層の上面で古墳時代前期遺構面（第2遺構面）を検出されている。第2遺構面は標高T.P +7.6mを前後する。第25層の褐色粗砂層は河川による堆積砂と思われる。これより下からは、今のところ遺物は発見されていない。

#### 2. 主な遺構と遺物

第4地区では古墳時代中期を主体とする遺構面（第1遺構面）および古墳時代前期の遺構面（第2遺構面）が確認されている。第1遺構面の遺構については調査区南側でしか確認されてい



ない。古墳時代前期の遺構面は第24層を基盤にし、溝、土坑などを主体とする遺構が調査区全体に広がっていた。

### 第1 遺構面

第1面は第22層の上面の遺構群で、古墳時代中期を主体とするものである。

#### 溝 SD-122

幅0.5m、深さ0.1mの溝で、埋土は上層が炭まじり灰黒色粘質シルトで下層は暗灰色粘質土である。

#### 溝 SD-123

幅0.8m、深さ0.1mの深い溝である。埋土は炭まじり灰黒色粘質シルトである。

#### 土坑 SK-124

幅1.4m、深さ0.2mの円形土坑である。灰黒色粘質シルトを埋土としている。底部は比較的平らになっている。

#### 土坑 SK-125

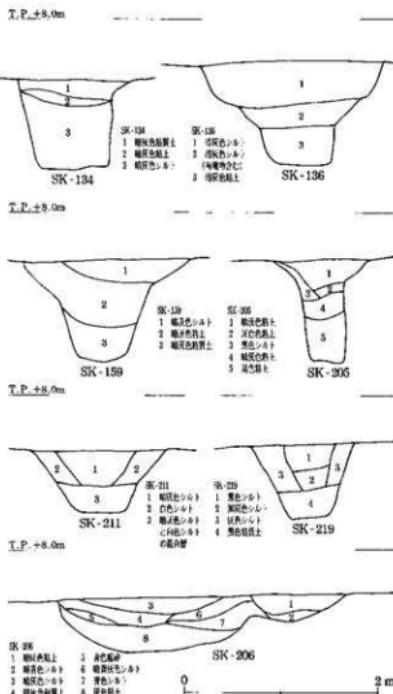
調査区の東壁にひっかかるように検出された。径5m、深さ0.2mの土坑である。埋土は炭まじり灰黒色粘質シルトである。

### 第2 遺構面（図版4）

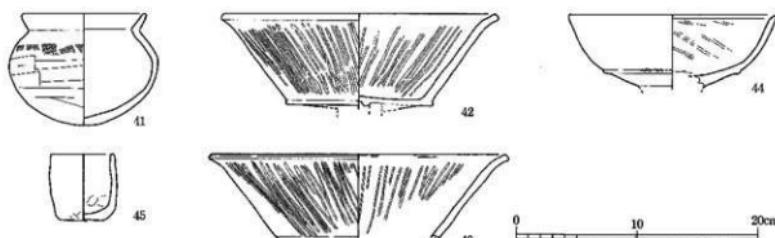
第2面は第24層の上面の遺構群で、古墳時代前期を主体とする。

#### 溝 SD-131

調査区南端で検出された浅い溝状遺構であ



第15図 第4地区主要遺構土層断面図



第16図 第4地区SD-131出土遺物実測図

る。

#### SD-131出土遺物（第16図）

土師器の小型丸底壺、甕、鉢、高杯などが出土している。おおむね布留式が主体と思われる。41は小型丸底壺で、口縁は短くおさめ、外面上半にハケ目を施している。42、43は杯部底部近くに稜がある高杯で、上半部は直行気味にのびて、内外面ともに丁寧にヘラケズリしている。

#### 土坑 SK-133

径1.1m、深さ0.4mの土坑である。暗灰色シルトを埋土とする。すり鉢状の底部である。遺物は土師器の小型器台や小型丸底土器などが出土している。

#### 土坑 SK-134（図版6）

幅1.9m、深さ0.9mの土坑である。埋土は3層に分かれており、下から暗灰色シルト、暗灰色粘土、暗灰色粘質土である。このうち下層の暗灰色シルト層がもっとも厚くしっかりしており、ここから土師器を主体にした遺物が出土している。

#### SK-134出土遺物（第17図）

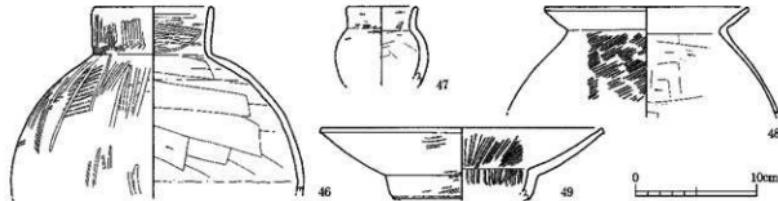
土師器の壺、甕、鉢などが出土している。おおむね庄内式後半が主体と思われる。46は直口壺である。直行する口縁を持ち、外面上半部は細かいタタキ、内面はヘラケズリをしている。47は小型丸底壺で、直立君の口縁があり、外面にはハケ目痕跡が残っている。48は庄内式の甕で、直行する口縁を有し、体部にはタタキの痕跡が残っている。49は有段高杯で内面をヘラケズリしている。

#### 土坑 SK-136（図版6）

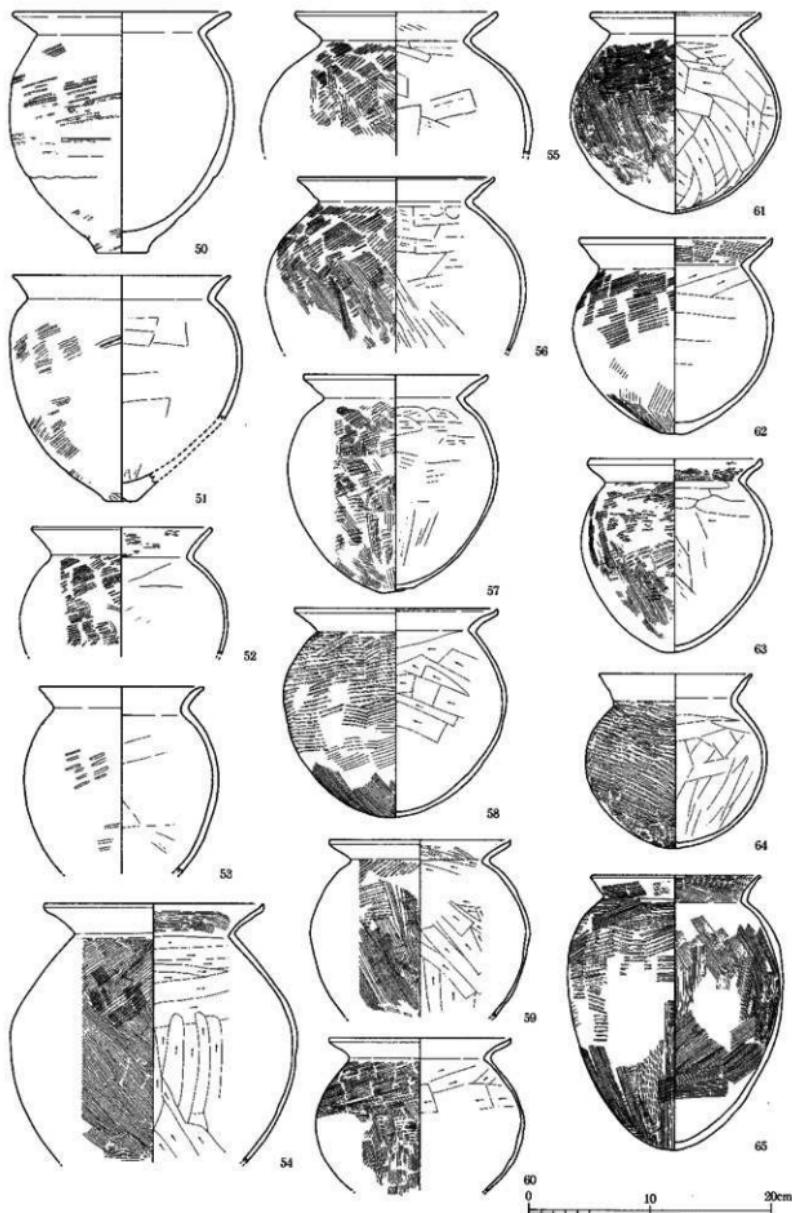
上部径2m、底部径0.6m、深さ1mの土坑状遺構である。途中、段がついて2段掘り土坑のような断面形態になっている。埋土は上層は途中に有機質を多く含む暗灰色シルトで、下層は暗灰色粘土があり、その間に植物遺体を含む暗灰色シルト層をはさんでいる。まとまった量の古式土師器が出土しているが、層位的には下層に集中している。

#### SK-136出土遺物（第18～20図）

土師器の壺、甕、高杯、手焙形土器などが出土している。50～53は弥生土器の系譜を引く甕である。胴部最大径は口径をしのぎ、胴部中央よりも上方にある。54～64は庄内式の甕である。大きさは54～56のように大型のもの、57～59のように中型のもの、60～64のように小型のものがあ



第17図 第4地区SK-134出土遺物実測図



第18図 第4地区SK-136出土遺物実測図(1)

る。これらは大きさや口縁形、プロポーションに若干の差があるだけではなく、調整なども若干のバラツキがある。54～63は体部最大径が口径をしのいで、位置も真ん中よりも上方にある。外面は上半にタタキ、下半にハケ目、内面にはヘラケズリをしている。対して64は直行する

口縁と球形の体部で、体部全面にタタキを施している。66、67はいわゆる布留式壺である。直線的にのびる口縁に長胴化の気配のある体部で、外面には縦や斜めのハケ目、内面にはヘラケズリを施している。68は手焙形上器である。底部は丸底である。口縁はややくの字状に曲がっており、覆部は口縁端部に接合している。体部外面には刷毛目が残り、覆部の開口部端部は面をなしており、面には竹管文を施している。

#### 溝 SD-137

東西方向の溝である。幅1m、深さ0.2mで埋土は暗灰色シルトである。

#### 土坑 SK-159（第19図）

一部2段掘り状態の土坑で、径1.7m、深さ1.2mである。埋土は上中下の3層に分かれ、堆積はレンズ状である。上層は暗灰色シルト、中層は暗灰色粘土、下層は暗灰色粘質土である。SK-159出土遺物（第21図）

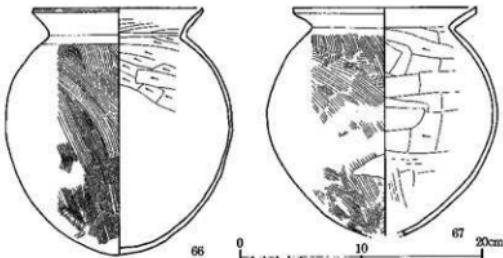
土師器の壺、碗などが出土している。69、70は庄内式の壺である。口縁端部はつまみあげられ、体部上半にはタタキが施されている。71は椀で底部には若干平坦になっている。

#### 溝 SD-163

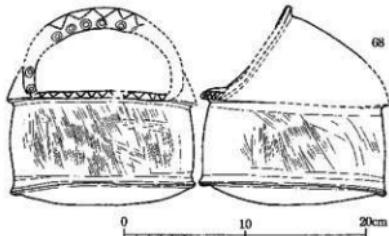
SD-166と重複している小さい溝である。幅0.4m、深さ0.3mで、埋土は暗灰色シルト層である。

#### 溝 SD-164

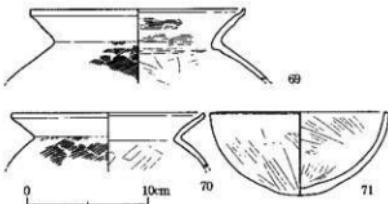
円形土坑である。幅1.2m、深さ0.2mで、埋土は暗灰色シルト層である。



第19図 第4地区SK-136出土遺物実測図（2）



第20図 第4地区SK-136出土遺物実測図（3）



第21図 第4地区SK-159出土遺物実測図

### 溝 SD-165

東西方向の溝である。幅0.6m、深さ0.3mで、埋土は暗灰色シルトである。

### 溝 SD-166

東西方向の溝である。幅1.2m、深さ0.4mで暗灰色シルト層を埋土とする。

### 溝 SD-168、169、170

SD-169を真ん中にして左右にSD-168、SD-170がとりつく形になっている。断面の観察でも重複関係ははっきりしなかった。埋土は暗灰色シルトである。

### 土坑 SK-171

調査区中央部で一部だけ検出されている土坑である。全形はわからないが、暗青色シルトを埋土にする浅い遺構である。遺物としては土師器の鉢や高杯が出土している。布留式（古）を前後するものと推測される。

### 溝 SD-201、SD-224

調査区中央部にある東西方向の小溝で、東端で重複している。SD-201は幅0.7m、深さ0.1～0.2mで暗灰色シルトの埋土、SD-224は幅0.6m、深さ0.1mで暗灰色粘土を埋土とする。東端で重複しており、土層断面をみるとSD-201が先行することがわかる。

### 溝 SD-204

東西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.1mである。暗灰色シルトを埋土とする。

### 土坑 SK-205

調査区中央部にある土坑である。南北径0.9m、深さ1mで、底は若干幅が狭くなっている。上部には暗灰色粘土が堆積、底部には暗灰色粘土や黒色粘土が堆積している。特に一番底の黒色粘土は層厚0.4mで、古式土師器を包含していた。

### SK-205出土遺物（第22図）

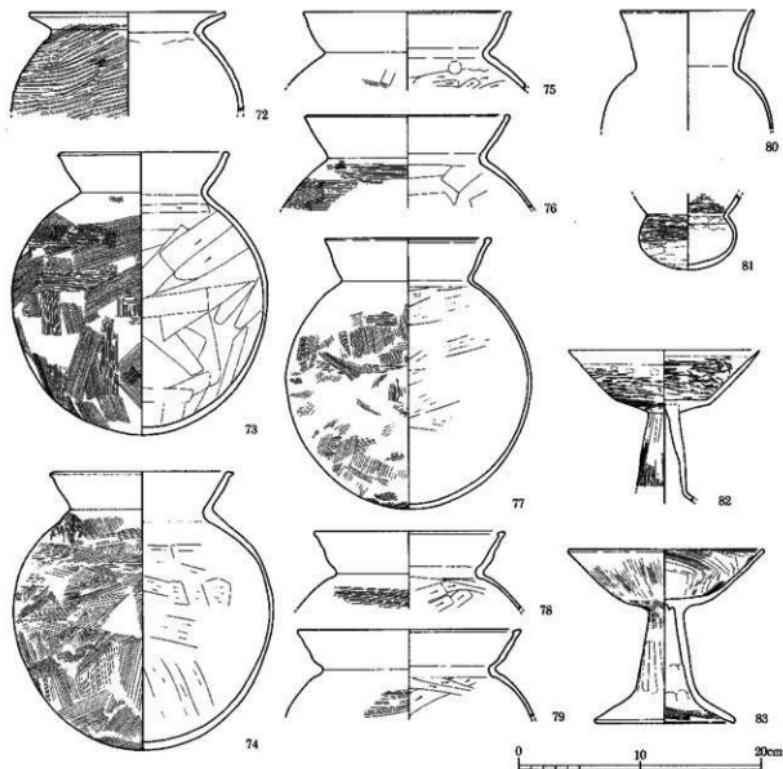
土師器の甕、壺、小型丸底壺、高杯が出土している。布留式期の所産である。73～79は布留式の甕である。そのうち73～76は口縁端部を平たく納め、外面には丁寧にハケ目を施している。また、77～79は端部を肥厚させている。82、83は高杯で、杯部が椀形に近くなっている。

### 土坑 SK-206（図版5）

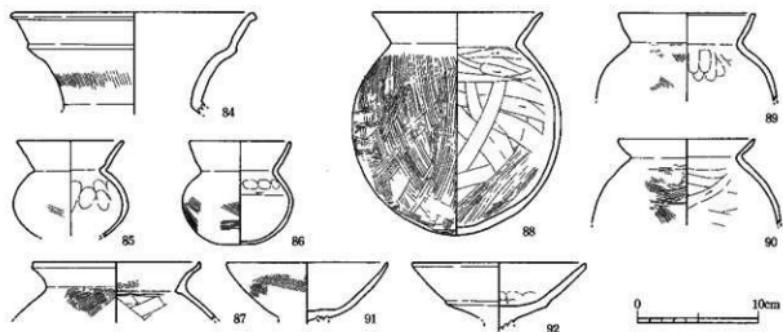
一見、東西に長いホタテ貝形ですり鉢形の土坑であるが、実際には土坑が2基接しているものである。西側土坑は径約2.0m、深さ0.7mであり、東側土坑は径1.0m、深さ0.3mである。埋土はレンズ状の堆積で、上部には暗灰色系統のシルトや粘土が堆積、下部には灰色系の粘土が堆積している。ただ堆積状況からみると、西側が先行する。

### SK-206出土遺物（第23図）

土師器の壺、小型丸底壺、甕、高杯が出土している。庄内式後半から布留式が主体である。84は二重口縁の壺で頸部にハケ目が残っている。85、86は小型丸底壺で、扁平な球状の体部に口縁がついて、外面にはハケ目を施している。87の甕は口縁端部を若干つまみあげながら、外面上部



第22図 第4地区SK-205出土遺物実測図



第23図 第4地区SK-206出土遺物実測図

にはハケ目を施している。88～90は布留式甕で、球形の体部に直行する口縁がついて、外面にはハケ目を施している。91は椀形の坏部の高坏で、対して92は底部に稜がある。

#### 土坑 SK-211

径1.35m、深さ0.6mの土坑である。埋土は上下2層あり、上層は暗灰色シルト、下層は白色～暗灰色シルトである。遺物は少ない。

#### 土坑 SK-218

径0.5m程度の土坑であり、埋土は暗灰色シルトである。

#### SK-218出土遺物（第24図）

上師器の壺、高坏が出土している。93は直口壺で、94は高坏で、杯部は稜線が消失し、椀形になっている。

#### 土坑 SK-219

径1m、深さ0.8mで底部は径が短くなっている。埋土は黒～灰色系統のシルトや粘質土が主体である。底部からは古式土師器がまとまって出土している。

#### SK-219出土遺物（第25図）

95は二重口縁壺で、外面上部にハケ目が残る。

#### 土坑 SK-220

径0.5m程度の土坑である。埋土は暗灰色シルトである。

#### SK-220出土遺物（第26図）

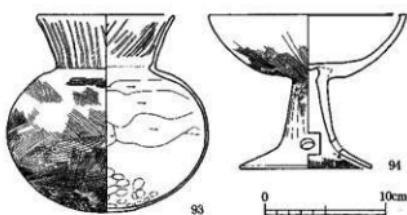
96、97は二重口縁壺の口縁部であり、98は布留式甕の口縁部である。

#### 第4地区第23層出土遺物

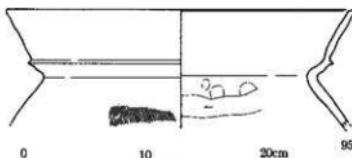
第4地区第23層は古墳時代前期造構面の直上を覆っている遺物包含層である。土師器の壺、甕、高坏、椀など古墳時代前期の遺物以外に、須恵器も出土している。

#### 遺物（第27図）

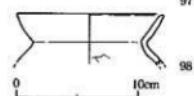
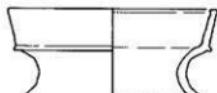
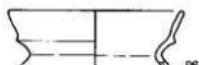
土師器と須恵器がある。まず土師器は、99は直口壺で口縁外面に丁寧なヘラミガキを施している。102は甕であるが、小さな平底のつくタイプと推測される。103、104は外面にタタキを有する甕で、105は布留式の甕である。高坏では、107は底部に稜線が残るが、108～110は全く椀形になった坏部である。須恵器では、113、114は坏部と脚部にそれぞれ稜線をもつ無蓋高坏で、透か



第24図 第4地区SK-218出土遺物実測図

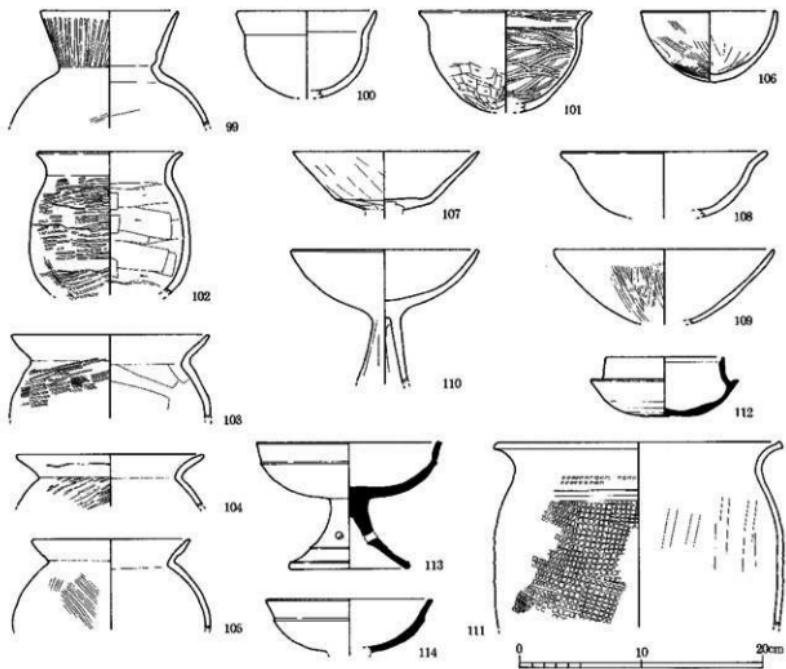


上師器の壺、高坏が出土している。93は直口壺で、94は高坏で、杯部は稜線が消失し、椀形になっている。



第25図 第4地区SK-219出土遺物実測図





第27図 第4地区第23層出土遺物実測図

しは三方にある。

### 3. 小結

第4地区的調査では庄内式（中、新）を主体とする遺構群と、布留式（古）を中心とする遺構群とを検出したことである。具体的に個々の遺構の出土遺物を見ると、同じ遺構内の出土遺物であっても、形式差のあるものが含まれている。しかしながら第4地区でも北側（下流側）は布留式（古）を中心しながら新しい要素が目立つ。対して南側は庄内式（中、新）が主体である。

たとえばSK-134、136は庄内式を主体にしながらも、布留式のものもふくんでいる。それに対してSK-206は布留式が主体である。前後する時期の集落が、互いに領域を接しながら存在する状況が読みとれるのである。

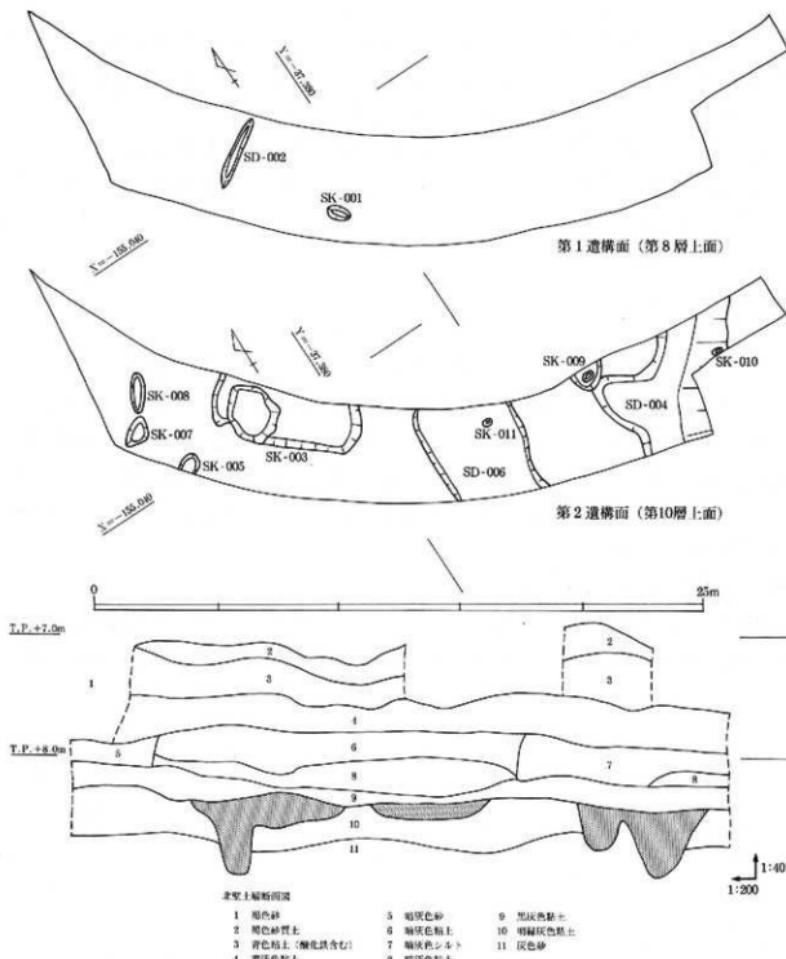
#### 第4項 第5地区（第28図）

了意橋下部の調査区である。

##### 1. 基本層序（図版7）

第1層は旧平野川の河底砂である。当地点は川が東西方向から、南北方向に向きを変える地点であり、調査区西端で、2、3、4層を切るような状態で検出された。

第2、3層は旧の耕作土層である。層厚0.4m程度の均質な土層で、水平に堆積する。第3層



第28図 第5地区遺構配置図

である青色粘土層は、多量に酸化鉄を含んでいる。耕作にかんする整地土であろうか。

第4層は青灰色粘土層である。弱粘性の粘土層で0.2~0.3mの層厚である。水平な堆積をしており、中世遺物を含んでいる。細片であるが15世紀代の瓦質羽釜を含んでいた。中世後期の堆積層であろう。

第5~7層は暗灰色粘土層や暗灰色砂層、暗灰色シルト層などを主体とする層群である。植物遺体を含む弱粘性の粘土層で、層厚0.2~0.4mで水平である。須恵器や土師器を含む包含層である。

第8~9層は古墳時代の遺物を含む包含層である。第8層上面では、須恵器や土師器を発見した他、小さいながらも溝状遺構と、上坑状遺構とを検出した。第9層上面では、遺構は発見されなかったが、層中には古墳時代前期を主体とする遺物が含まれていた。

第10層は明緑灰色粘土層で、上面では古墳時代前期を主体とする遺構群を検出した。

第11層は灰色砂層である。調査区全体で検出されている。明緑灰色粘土層の下層にあたり、この層より下からは遺物は検出していない。

## 2. 主な遺構と遺物

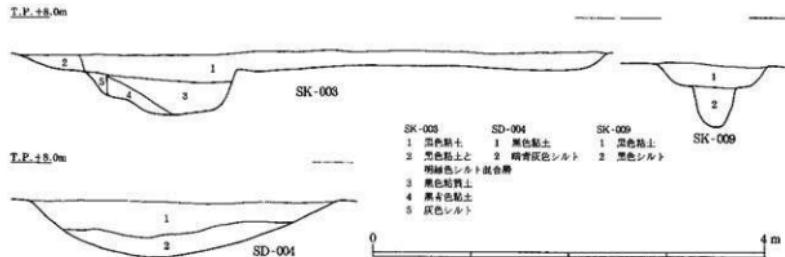
### 第2遺構面(図版7)

土坑 SK-003

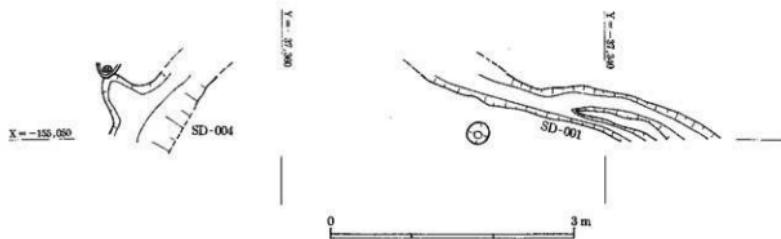
方形の浅い遺構と不整形の大きな上坑状の遺構とが重複、2段構えの如くに見える遺構である。下段の土坑は略方形で一辺2m、深さ0.5m、底はレンズ状である。上段は浅くて底面は平坦である。埋土は黒色粘土を主体としながら何層かにわけられる。下段は下面が砂層の8層に接しており、水がたまりやすい構造のようである。上部遺構の北端は調査区外で検出されていないが、水溜や洗い場のような施設の可能性も考えられる。遺物としては庄内式後半を主体とした土師器壺、鉢、甕などが出土している。

溝 SD-004(第30図、図版8)

調査区東端で検出された溝状遺構で、東北~西南方向にのびる。間に突出する部分を持ち、調査区外へと伸びている。上部幅で3m、底部幅で1m、深さは0.4~0.6mである。突出する部分



第29図 第5地区主要遺構土層断面図



第30図 第1地区SD-011、第5地区SD-004位置関係図

は砲弾形をしており、奥行き2.5m、深さは付け根部分で0.4mである。肩部の標高はT.P.+7.27~7.58m、底部の標高はT.P.+6.63~6.96mである。

埋土は2層にわかれる。上層は黒色粘土層、下層は暗青灰色粘土層で、自然堆積の状況を示している。上層の黒色粘土層には土師器を主体とした土器群を含んでいる。土器は残りの良いものが多く、溝の埋没途中で、何らかの理由により配置された可能性がある。遺物は土師器の壺、甕、高杯などであり、時期的には庄内式から布留式のものを主体としている。

この遺構を更に延長すると、平成8年度に調査を実施した第1地区のSD-011とは直行するような位置関係になっている。この第1地区的SD-011でも一定量の古式土師器が、同様な状況で出土している。方形にめぐる周溝の一部であった可能性もある。

#### 土坑 SK-005、007、008

調査区西側の土坑群である。長径1.2~1.6m程度の土坑で、黒色粘土を主体とする。

#### 溝 SD-006

東西幅1.9m、深さ0.15mの浅い溝状遺構である。南北方向の溝で黒色粘土を埋土とするが、遺物は含んでいない。

#### 土坑 SK-009(図版8)

土坑状遺構で、径1.1m、深さ0.7mである。内部は2段になっており、上層は黒色粘土、下層は黒色シルトである。まるで安置されたかのような状態で遺物が出土している。土師器の壺、甕、高杯、鉢などで、庄内式が中心である。

#### 第4項

##### 3. 小結

第5地区的調査では溝SD-004を主体とする、溝や土坑などの遺構群を検出した。この中にはSK-009のような水溜施設のような遺構があり、居住域に近いことを思わせる。

またSD-004は方形の周溝遺構の一部である可能性がある。断定はできないものの、溝内部の土器の出土状況などから考えると、周溝墓の一部である可能性も捨てきれない。

## 第5章 まとめ

1級河川平野川改修に伴う木の本遺跡の調査では、結果的に、遺跡を南北に貫く形での調査になった。各調査区の幅は最大地点でも5mに過ぎないので、線的な調査に終始した。幅の狭いトレンチという制約から、検出遺構についても、性格のよくわからないものが多い。しかしながら集落跡を端から端まで、貫いて調査したことにより、地区毎の時期的な特徴なども一定わかるようになった。以下、木の本遺跡の発掘調査を通して、若干の考察をしたい。

### (弥生時代)

細片ながら弥生時代の遺物は確認されているが、当該時期の遺物を単独で出土する遺構は確認していない。しかし、平野川調査区の西南方では、畿内第II様式を中心とする弥生時代の遺構、遺物も確認されている。弥生時代中期集落の本体は、平野川調査区の西側に存在したものと推察される。

### (古墳時代)

平野川改修関連の木の本遺跡の調査では、古墳時代前期～後期を主体とする遺構群が検出された。地区別に様相を見ると、第2地区は庄内2、3式段階から布留式が主体で、6世紀代の遺構、遺物も含んでいる。第3地区は5世紀後半～6世紀を主体としている。第4地区は南半は庄内2、3式を主体とする遺構が多くて、北半は布留2式を主体とする遺構が多い。第5地区については、庄内2、3式が主流である。このように場所による時期差がみられる。

地区によっても時期的な傾向はみられるが、同じ調査区内の同じ遺構面においても、細かくみると時期が前後する遺構が存在する。一定範囲内における、時期による居住地域の変遷が、このような遺構の分布として現れたのであろう。庄内～布留式前半までの遺構は、調査区全域にわたって、広く確認されるが、全般的に井戸、土坑や溝などが多く、ピットなどは疎らである。基本的に居住域の縁辺であることを示唆するものであろう。

一方、古墳時代中～後期の遺物については、包含層レベルでは少量ずつながらも広範囲に広がっているものの、遺構としては分布範囲が限定されており、全体としては希薄である。遺物の出土の多かったのは、南端の第3調査区であった。しかしながらここは擾乱が激しく、遺構の実態はよくわからなかった。古墳時代前期については中核的な集落遺跡の様相を示しているが、古墳時代中期の様相はそれとは異なっている。拠点的集落といった雰囲気ではなく、散在的で小さな集落という印象しかない。集落の縁辺に相当するのか、あるいは点在的な遺構の分布をしているのかどちらかである。

また注目すべき遺構としては、前述したように、第1地区のSD-011（平成8年度調査）と第5地区のSD-004がある。互いに北側に延長すると直行する角度になること、土層の堆積状況や遺物の出土状況が似ていることなどから、関連する遺構の一部であることは確実である。コーナー部分は調査区からはずれており検出できなかったが、SD-001の東端も南方へ屈曲するかの如き振れ方を示している。方形周溝状になる可能性がある。方形周溝状であるとすると、1辺7m程

度の遺構が推定される。良好な状態の土器がまとめて安置された状態で出土している点、穿孔された土器が含まれる点など、土器供獻の色彩が濃厚である。これが墓の周溝になるのか、それ以外の祭祀的な遺構であるのかは断定が出来ない。しかしながら、住居域に接してこのような空間が確認されたことは興味深い。集落の西南に墓域もしくはそれに類する特殊な空間が存在した可能性がある。

#### (古墳時代前期の木の本遺跡とその周辺)

一方、木の本遺跡周辺の状況をみると、古墳時代初頭以降、雨後の筈の如く、集落数が増加する。前代の弥生時代においては、流域毎に拠点集落とそれから派生したいくつかの小集落が見られる程度であった。ところが、古墳時代になると、旧の大和川流域沿いには集落が延々と続き、広大な居住区が出現する状況に変化した。前時代と比べると、質量として、圧倒的な差がある。

大和川が生駒の山並みを越えたところに本郷遺跡、船橋遺跡が、平野川と長瀬川にはさまれた三角地帯に、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、加美遺跡、亀井北遺跡、跡部遺跡などの遺跡が、玉櫛川と長瀬川にはさまれた三角地帯に中田遺跡、矢作遺跡、成法寺遺跡、小阪合遺跡、菅振遺跡、東郷遺跡などがある。

木の本遺跡をも含めたこれら遺跡群は、庄内期の間に成立する。一部、布留式以降まで存続する遺跡があるものの、大半は布留期前半には衰退し、それ以降は拠点的集落としての性格を失っている。どの遺跡も似たような傾向にある。

羽曳野丘陵での古墳の築造が活発になるのは、中河内での集落群が衰退して以降のことである。中河内の集落群の動向は、南河内での占墳群成立の前提になったのであろうか。

#### (古代)

古墳時代以降、古代時期の遺構、遺物は、第2地区においていくらかの出土がみられる。包含層には奈良、平安時代の遺物も含まれている。これらは量的にはそれほど多いわけではないが、幅広い時期の遺物がある。調査区周辺で当該時期の集落が営まれていた可能性がある。また明らかに古代のものと思われる平瓦も出土しており、寺院などの瓦葺の建物が存在した可能性が濃厚である。

#### (中世以降)

上部の包含層からは14~15世紀を主体として、瓦質羽釜や土師質小皿などの土器が出土している。これらの中世遺物は中世時期の開墾や耕作に伴う所産と思われる。

また調査区の上部にたまっていたヘドロを除去すると、黄褐色をした旧平野川の河底砂が検出されるが、ここからは唐津焼や、染付碗などの近世遺物が出土している。これらは16世紀以降のものが主体で、平野川の流路が現在の経路に固定された時期を示すものと推測される。

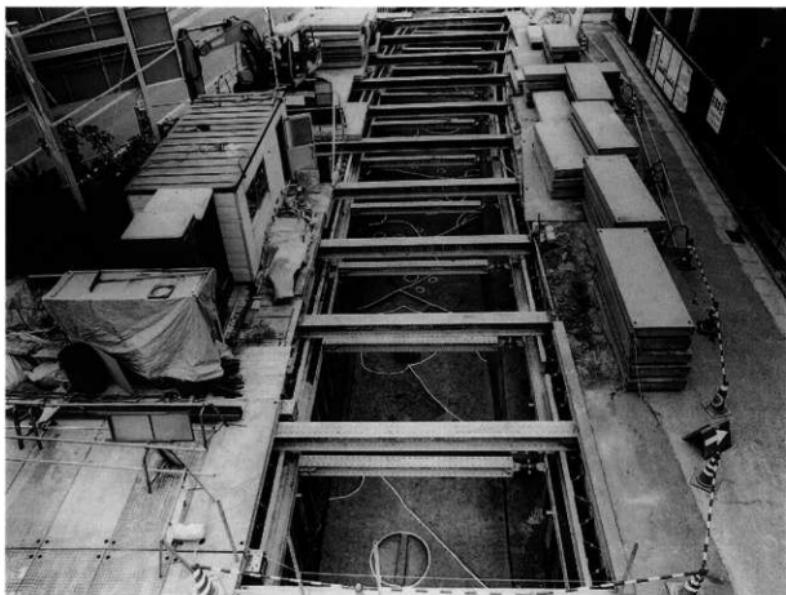
## 報告書抄録

| ふりがな          | きのもといせきはくつちょうさがいよう                        |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
|---------------|-------------------------------------------|-------------------------------------|----------------------------------|--------------------|-----------|--------------------|---------------------------|--------------|
| 書名            | 木の本遺跡発掘調査概要IV                             |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 副書名           | 1級河川平野川改修工事に伴う発掘調査                        |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 巻次            |                                           |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| シリーズ名         |                                           |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| シリーズ番号        |                                           |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 編著者名          | 岩瀬透、横田明                                   |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 編集機関          | 大阪府教育委員会                                  |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 所在地           | 〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351 |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| 発行年月日         | 1999年12月                                  |                                     |                                  |                    |           |                    |                           |              |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                               | コード                                 |                                  | 北緯<br>°°°          | 東経<br>°°° | 調査期間               | 調査面積<br>(m <sup>2</sup> ) | 調査原因         |
| 木の本遺跡         | 八尾市木の本<br>2、3丁目                           | 市町村                                 | 遺跡番号                             | 27212              | 35        | 1997年4月<br>1999年3月 | 1300                      | 1級河川平<br>野川改 |
| 所収遺跡名         | 種別                                        | 主な時代                                | 主な遺構                             | 主な遺物               |           | 特記事項               |                           |              |
| 木の本遺跡         | 集落                                        | 古墳時代～<br>平安時代、<br>室町時代<br><br>近世～近代 | 溝、ピット、土坑、<br>落ち込み<br><br>旧平野川、井戸 | 土師器・須恵器・<br>瓦器・陶磁器 |           |                    |                           |              |

# 図 版



第2地区 自然河川NR-01土層断面



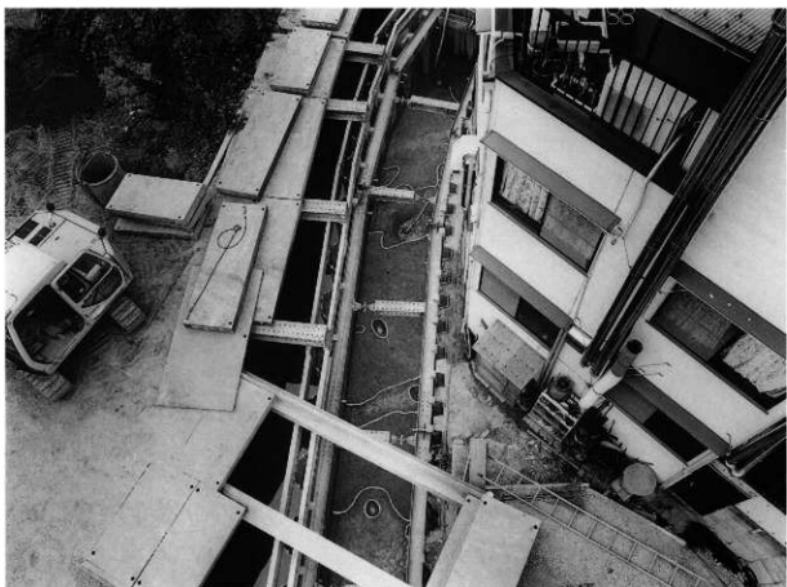
第2地区 第4造構面南半部(北から)



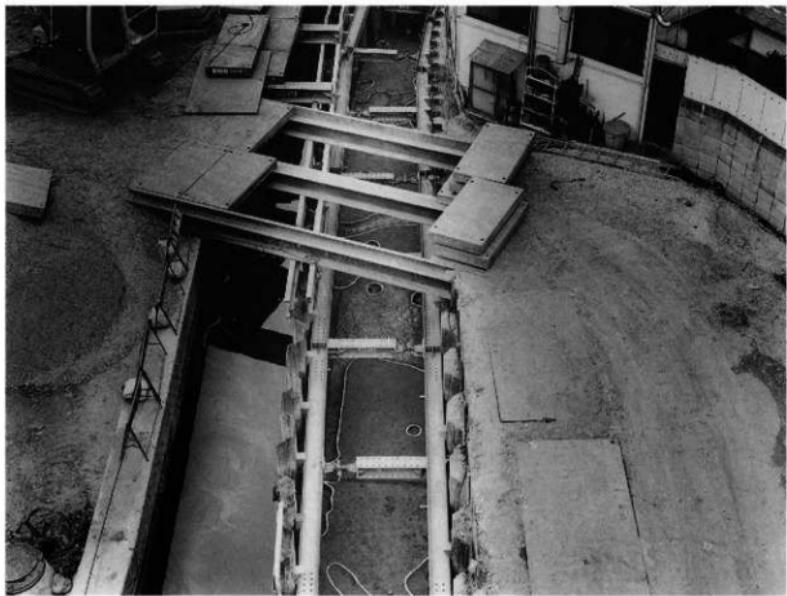
第2地区 SK-070 遺物出土状況



第2地区 SE-048 遺物出土状況



第3地区 第2造構面北半部(南から)



第3地区 第2造構面南半部(南から)



第4地区 第2遺構面北半部(北から)



第4地区 第2遺構面南半部(北から)



第4地区 西壁土層断面



第4地区 SK-206



第4地区 土坑SE-136 遗物出土状况



第4地区 土坑SK-134



第5地区 第2造構面西半部(北から)



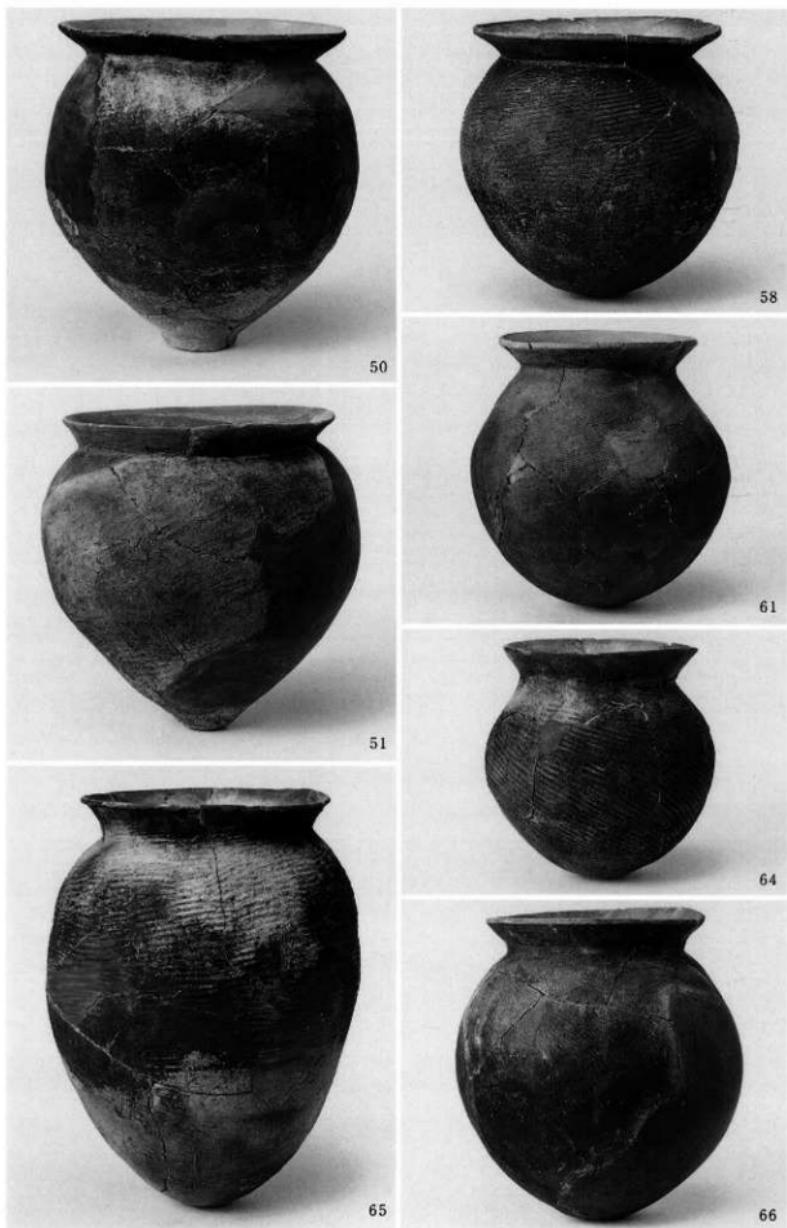
第5地区 北壁土層断面



第5地区 SD-004 遺物出土状況



第5地区 SK-009 遺物出土状況



50、51、58、61、64、65、66……SK-136



68



68



46



71



41



84



42



88



92



86

41、42……SD-131 46……SK-134 68……SK-136 71……SK-159  
84、86, 88, 92……SK-206



73



74



77



93



83



94

73、74、77、83……SK-205 93、94……SK-218

**木の本遺跡発掘調査概要・IV**

**— 1級河川平野川改修工事に伴う発掘調査 —**

**発 行 1999年12月**

**大阪府教育委員会**

**印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所**

